

論文の内容の要旨

論文題目 蕭公権の政治思想

氏 名 張允起

蕭公権(1897-1981)は、中国における近代政治学研究に多大の貢献をした政治学者である。本稿は、蕭公権の研究成果を具体的に検討し、その研究の問題意識と方法論の意義を思考し、彼の政治学研究の特徴を明らかにすることを目標とする。

序では、蕭の家庭環境と知的背景を述べる。第一章では、近代中国政治学界と政治多元論との関わりを追究して、重点的に『政治多元論』の内容を考察する。そして、蕭と西洋近代政治学者の関係を手がかりとして、彼の西洋政治思想研究の問題意識と方法論的特徴を考える。政治多元論の受容は、当時の中国の政治現実との間に密接な関係がある。それに対して、当時の中国政治学界は積極的な態度を示したが、政治多元論それ自身についての学理上の検討は充分に行われたと言い難い。蕭公権の『政治多元論』は、法、政治、経済、哲学、倫理などの側面から政治多元論を綿密に考察し、検討したものである。彼は、抽象的一元論(abstract monism)→抽象的多元論(abstract pluralism)→具体的一元論(concrete monism)というふうに一元論と多元論の発展を歴史的に捉えた。そして、ギリシア、ローマから中世、近代に至るまでの西洋政治思想を振り返って、現代の多元論者の言論によって示唆された一元論とギリシア政治理論との親和性、および現代と中世における多元論の類似点と相違点を指摘した。西洋政治理論の研究に関する蕭公権の基本的な立場は、二〇年代のアメリカ政治学界の変動と密接な関係がある。彼に直接的な影響を与えたのは、セイバインの方法論、主権に対するウィロビーとフォレットの見解、およびフランク・ティリーの哲学的立場であった。彼は多元論者の矛盾を指摘する一方、それを完全に否定しようとするのではなく、むしろその理論の中の新しい要素を積極的に取り入れて、伝統的一元論の欠点も意識し、両者の歴史的背景と相互関係を総合的に把握した上に、「具体的一元論」の可能性を展望した。同時代の西洋政治学者に対する評価でも、同じように、その歴史的背景と相互関係を総合的に把握した上に、その得失を分析し、価値判断を下した。それは多元論と一元論の調和、あるいは政治理論と政治

科学の融合を図るセイバインの方法と立場と通じる。これは彼の「総合の担い手」としての第一歩であった。

第二章では、蕭の思想形成の歴史的背景を概観した上で、学術と政治の関係に関する彼の言論、およびその政治的判断の具体的な内容を考察し、彼における「自由社会主義」の概念を吟味し、政治理念と政治現実の間を往き来する彼の認識の特徴と立場を考える。蕭公権は、今世紀の三、四〇年代において、学術と政治の関係を考えながら、学術の独立を説いて、当時の中国内外の政治現実に直面し、具体的な意見を提出し、彼の政治的判断の一端を同時代の人々に示していた。そこにあらわれたのは、彼の『政治多元論』以来の強い立憲主義の立場、近代民主制度に対する肯定、人類理性への愛着、政治生活の基礎的な部分に対する重視、国際秩序と主権国家の関係をめぐる思考などである。三、四〇年代の憲政と「訓政」に関する論説、「統一」と「均権」に対する強調、四〇年代の「妥協」論、更に政党政治、選挙制度、地方自治、言論の自由などに関する発言は、いずれも理念、歴史、現実を十分に配慮し、当時の様々な世論を総合的に把握した上での一政治学者としての思慮の結果であり、いわゆる「御用学者」または特定の党派に属する知識人の意見とは明確に区別される。また、国防、外交、国際政治に関する彼の議論にも現実主義と理想主義という二つの側面があり、それまでの世界機構の欠点を意識しながら、「近代の超克」や「西洋の没落」などの立場を取らず、世界平和に関する中・西思想の共通点を探り、国際平和への中国の貢献を期待する。彼は、「科学としての政治学」に務めて、自分の専門知識を生かして、「自由社会主義」という概念を発展させたばかりでなく、「自由」そのものに対しても、中国と西洋の政治思想の文脈を概観した上で新しい解釈を与えた。それらは、政治現象とその背後に隠された思想背景を、歴史的総合的に把握しようとする蕭公権自身の思想構造を浮彫にし、「総合の担い手」としての彼の立場も容易に看取される。

第三章では、当時の中国政治思想史研究の学術背景を概観し、蕭の『中国政治思想史』の内容を具体的に考察し、その特徴を分析し、彼の中国政治思想研究の問題意識と方法論を検討する。彼は、中・西政治思想の比較に務めながら、先秦諸子を代表とする中国政治思想の原型を検討し、西洋思想を中国思想と付会する傾向を批判する一方、中国政治思想自身の変遷にも注目し、その内部の変化と発展の契機を探究し、中国政治思想の停滞論を否定する。彼は、研究対象の時代背景を十分重視した上で、時には研究対象の思想世界の内部へ入りこみ、その論理上の矛盾を指摘し、その得失を判断し、さらに研究対象との対話を試みた。そこに窺えるのは、『政治多元論』以来の問題関心と立場である。彼は、抽象的な分析を避けて、

原資料に基づいて、研究対象を具体的に把握し、単なる「伝統批判」、または「伝統擁護」という立場を取らなかった。蕭公権の『中国政治思想史』の完成は、「中国政治思想史」という専門分野の確立を象徴するものであると言ってもいい。彼は、自分が生きている二十世紀の時点を強く意識し、中国の文化遺産を人類歴史という広い視野の中で反省しようとした。問題関心としては、三、四〇年代の彼の政治的判断とも内在的な関連を持っている。清末以来の「中体西用」や「全面的西洋化」などの議論に対する一つの回答として、梁啓超の中国政治思想研究の意図との間に連続性が見られる。それは「西洋中心主義」、あるいは「中国中心主義」といういずれの立場とも区別される。蕭公権の中国政治思想研究は、「類型論」または「単なる歴史的な方法」を避けて、研究対象の歴史背景に注意しながら、思想家および各流派の思想的な関連を中・西政治思想史の範囲の中で横断的、または縦断的に考察し、動的にその個性と意味を把握しようとした。その方法論には、トレルチ、マンハイムを代表とする、ダンニング、マツキルウェイン、セイバインの政治学史研究で現われた二十世紀の「歴史主義 (Historismus)」からの影響が見られる。

第四章では、蕭の『中国郷村』、戊戌維新研究、康有為研究を検討し、その研究方法、問題意識、および彼の文明観を考察する。彼は、当時のアメリカにおける中国研究の先入観を排斥し、「儒教国」という通説に異議を唱えた。帝政中国の農村支配に対する蕭の研究は、先行研究を修正し、あるいは更に具体化した。『中国郷村』は、帝国の統治者の心理、地方官吏の行為、郷紳の役割、農民の反応のほかに、保甲、里甲、社倉、宗族、社学、郷約などの地方制度、慣習も考察の対象とされ、それらの要素を大きな政治システムの中から看取り、帝政中国という構造を明らかにしようとしていた。「翁同龢と戊戌維新」という論文の意図は、戊戌維新の発生する歴史環境を明らかにすることにある。蕭は、先行研究を参考にしながら、政治史と思想史の方法を駆使し、時には研究対象に対する心理分析と道徳評価も行う。彼は、研究対象を歴史状況の中に置き、保守派、温和改革派、急進派の思想と動機を歴史全体の文脈の中で把握し、「戊戌維新」の立体像を描こうとしている。康有為研究に関しては、蕭公権は、以前の自説を修正し、基本資料をもとにして、康有為の思想の内部に入りこみ、康の問題意識をある程度自分の問題意識とし、その思想内部の論理性を見つけ出し、また歴史的な文脈の中で整理して、康有為思想の全体像を読者に示した。それは康有為個人の思想を明らかにすると共に、中国近代思想史における諸問題を再整理した。蕭公権は、康有為の思想を哲学、政治、行政、経済、教育などの側面から考察し、伝統と近代、中国文明と西洋文明の融合を図る康有為の「文化綜合 (cultural synthesis)」の方法を高く評価した。そして、康有為と同じように、

本来の儒家思想と専制君主に利用されてきた「帝国儒教」を区別し、本来の儒家思想と民主主義の間に接点があったと明確に認識した。その上、儒家思想を中国文化全体の一部分とみなし、中国文化の多元性を強調した。人類文明の問題に関して、「中国中心主義」の態度にしても、「西洋中心主義」の態度にしても、いずれも「文化的な傷(cultural trauma)」の徴候である。普遍化の道を通じて、文化総合(cultural synthesis)に努めることこそが、中西文化論争を解決する正しい方法である。これは康有為の立場であると共に、蕭公権自身の立場でもあった。このような「総合」の方法は、蕭公権の学術思想の特徴を示しただけでなく、政治学における「第三の道」も暗示している。

結びの部分では、蕭公権の業績を振り返って、マンハイムの理論に即して、蕭の政治学研究の特徴を再確認した。「総合の担い手」としての蕭公権は、抽象的な理論と方法というよりむしろ具体的な研究を中心にして、シュペングラーやトインビーなどと異なる「総合」の方法を通して、中国ないし全人類の歴史、現実と未来を思考し、政治学における「第三の道」を示した。